

## (変わる大学入試2020) 英語民間試験、利用しないわけは 京都工芸繊維大・羽藤由美教授に聞く

有料記事

2019年4月30日05時00分



京都工芸繊維大のスピーキングテストを受ける1年生。座席の間隔を開けて実施している(同大提供)



改善と並行して、大学院の入試へのスピーキングテスト導入をめざした。プロジェクトを立ち上げたのは12年。開発に2年余りかかり、15年から1年生全員が学年末試験として受けている。17年からはAO入試の一部にも導入している。

——どんなテストか。

コンピューターの画面を見てマイクで話す。間違いを恐れず手持ちの語彙(ごい)や文法を使って、与えられた課題を解決できるかを見ている。例えば、学生の代表として自分の大学をより良くする方法を60秒で教員に提案する。これが課題だ。評価するのは文法的な正確さではなく、課題の達成度。課題によって想像力や批判的思考力なども試される。

——4技能の育成をめざしながら、やはり4技能をはかる民間試験の活用を見送ったのは。

入試に必要な公正性・公平性に欠けるからだ。新制度では、異なる民間試験の成績で同じ大学の合否判定をする。試験によってはかる能力は違うので、握力と50メートル走の成績を比べて体力の順位づけをするようなものだ。

工科系単科の国立大学である京都工芸繊維大学は、英語のスピーキングテストを独自に開発し、入試に活用してきた。一方、2021年春の大学入学共通テストでは、英語の「聞く、話す、読む、書く」の4技能をはかる民間英語試験を利用しないと決めた。なぜなのか。研究開発のリーダーを務める羽藤(はとう)由美教授(応用言語学)に聞いた。

——スピーキングテストを開発したのはなぜか。

我々の大学は7割以上が大学院に進み、卒業後は企業人として海外とやりとりする者が多い。研究でも仕事でも、英語の読み書きはもちろん、口頭で説明したり交渉したりする能力が必要だ。そのため、教育の

異なる民間試験の成績を比べるために使われる「対照表」にも問題がある。各試験団体はそれぞれの試験のスコアと欧州言語共通参照枠（CEFR）の各レベルとを対応づけて、文部科学省に届け出た。対照表はその対応づけをつなぎ合わせたもので、科学的な検証が行われたとは確認できず、信用できない。

住んでいる地域や家庭の豊かさによる不公平もある。新制度では、幼い頃から民間試験を簡単に何度も受けられる生徒が断然有利だ。

——テストを実際に運営する立場から見ると？

まず採点が不安だ。複数の採点者が多数の音声回答を同じ基準で採点するのは極めて難しい。我々の大学のAO入試では、5人の専任教員が並行採点する。基準を共有するための訓練に半日以上かけて採点しても、他の採点者と大きくずれた採点結果は出る。そういう難しさを前提とした継続的な採点者の訓練と、採点のチェック体制が必要だ。

費用もかかる。我々の1年生対象のスピーキングテストだと、運営費だけで受験者1人あたり7千円近くかかる。民間試験の中には、4技能の受検料が同程度のものもある。どの部分の経費が抑えられているのかが気になりだ。

受験生がテストを受けた際の不公平感も懸念材料だ。我々の1年生対象のテストでは「他の受験者の声が気になった」といった声が出た。入試となると苦情が殺到する可能性もある。

——最も心配なのは。

採点ミスやトラブルが隠蔽（いんぺい）されることだ。国は各試験団体に作問や試験の運営、採点を丸投げし、不正や問題漏洩（ろうえい）が発生したときの対応も試験団体任せ。最低でも国が監視し、査察する制度が必要だ。

——だが大学の多くは民間試験を活用する。

文科省の方針には逆らえないとして、民間試験の成績が合否判定に与える影響を少なくする方法を考えた大学が目立つ。大学の身勝手に、受験生への配慮が足りない。

——では、どうすれば。

民間試験の活用は、数十万人に一斉に4技能テストを実施するのは無理だとして決まった。だが、小さな大学で積み重ねてきた試行錯誤を振り返ると、一国の共通テストの制度設計があまりに安易に感じる。

やるならやるで運営は民間に任せてもいいが、テストの仕様は国が研究者や教員、関連企業の知恵を結集して作り、テストを一本化すべきだ。ポイントは国が主導権を握ることだ。そうしなければ、公平性の担保ができずトラブルにも対応できない。（聞き手、編集委員・氏岡真弓）

\*

はとう・ゆみ 京都工芸繊維大教授。福井県立大助教授などを経て現職。著書は「英語を学ぶ人・教える人のために—『話せる』のメカニズム」など。

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.